

第40回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■小学校5年生の部 最優秀賞

ヘレン・ケラー

美留和小学校 中村 諒さん



私の担任の先生は、とてもこわいんです。私がめんどろくさい宿題や仕事をやらさないでい

ると、

「いやなことはもうやめなさい」「他のこともしなさい」「

と、いやじゃないこともやらせてくれません。授業中ずわっている時、足が少しでも開いていぬよ、

「足閉じなさい」

と言ったり、背中が丸いと

「背中ー」

と言ったり、背中を無理やり直したりします。だから、私はいつも、

「もうちょっとやさしくしなければいいのにな」と思います。

この本に出てくるヘレンにも、サリバン先生という先生がいます。ヘレンは赤ちゃんのころ、二つの病気にかかってしまい、目と耳が不自由になり、口もきけなくなっていました。そんなヘレンのところに、目が見えるようになって学校を立派な成績で卒業したサリバン先生がはげんされてきたのです。

ヘレンとサリバン先生は、死にものぐるいで勉強をして、言葉を覚えたり字を

書いたり、話したりすることができるようになりました。その後、もっと勉強して、障がいのない人でも入るのが難しい大学に入りました。卒業した後は、目や耳の不自由な人のために講演会を開きお金を集めて寄付しました。

ところが、ヘレンが世界中を飛び回っている間に、サリバン先生が亡くなってしまったのです。しかし、悲しみに負けずに世界中で活やくしました。

私とヘレンは、にている。なぜかという、わがままなところがあるからです。

ヘレンは小さいころ、何かいやなことがあったり自分の思い通りにならなかったりすると、すぐに短気をおこす少女でした。例えば食事の時、ヘレンは自分の好きな物があれば、となりの人の料理でも手づかみで食べてしまいます。でも、ヘレンのお父さんもお母さんも、ヘレンはかわいそうだからと行って、わがままを許していました。

ところが、サリバン先生はそれを許しませんでした。ヘレンがサリバン先生の食事に手をのばした時、サリバン先生はヘレンの手を強くはらひのけました。ヘレンがくやしきあまり、泣きさげんだリテールをたたいたり、ずわっている先生を引きたおそうとしても、絶対に許さなかったのです。

私は、四年生のころまでは好ききらいがともほげしく、前の学校の時は給食を良く残していました。でも、今の学校に来てから、給食を残すことができなくなりしました。なぜかという、先生に

好ききらいをしたらだめときびしく言われたからです。そのころは、食べられなくてよく泣いていました。だめと言われた時は、

「先生は、人の気持ちを全然わかってない。」「

と怒っていました。でも、先生は許してくれませんでした。

ヘレンは、お父さんとお母さんがかわいそうだと行って甘やかして育てたので、いいことと悪いことがわからなくて、自分のしたいことを通そうとして、わがままをしています。私の場合は、いいことと悪いことはわかっていて、自分のしたいことを通そうとする気持ちの方が強くなってしまいました。わがままをしています。

サリバン先生は、ヘレンのわがままを、たとえ何をされても許しませんでした。私の担任の先生も、私があきらめて先生の言うことを聞くまで、私のわがままを許してくれませんでした。よく考えると、サリバン先生と私の担任の先生もにている気がします。

先生たちは、なぜ私たちのわがままを許してくれないのか、考えてみました。

それは、先生たちは私たちに、わがままでは大人になってから社会の中で生きていけないし、いいことと悪いことを自分で判断させたいからなのかもしれないと思います。

私は、今もよく先生に注意されたりしかられたりします。その時は、ついイラツとしてしまいます。でも、先生は私の

ことを思っていていると思えば、少しは気分が落ち着きます。

ヘレンは、サリバン先生の指導を受けて、とてもやさしく、人のためにもがんばる子になり、大人になってからは目や耳の不自由な人のために働きました。私の夢は、パティシエールになって、世界中の人をお菓子で喜ばせることです。だから、夢に向かって進むために、わがままを直して、やさしくて人のためになんばって働く人になりたいです。

書名『子ども伝記全集ヘレンケラー』

山口 正重 著

(寸評)

ヘレン・ケラーと、中村さん、サリバン先生と担任の先生の、似ている所を上手に見つけて書いていますね。

先生たちが、生徒のわがままを絶対に許さなかった理由をいいことと悪いことを自分で判断させたいからだと中村さんは考えました。そのとおりだと思います。

今は、注意されてイライラすることもありますが、大人になって、きつとヘレンのようなやさしくて、人のために働ける人になれると思います。夢がかなうといいですね。



■小学校6年生の部 最優秀賞

人間も動物も命の重さは同じ

弟子屈小学校 益子 咲希さん



皆さんは、たかが犬と違って、暴力をふるっていいと思いますか。もし暴力を受けた犬に出会ったらどう

しますか。

もちろん、助けたいと思うでしょう。私も助けたいと思います。でも、どうしたら助けられるのだろう。私に何ができるのだろう。と考えてしまいます。

そんな時出会ったのは、「虐待を受けた犬・ベティ」という本でした。

この本は、虐待を受けた犬とドッグトレーナーがともに歩んだ日々を物語にした作品です。

本を読むまでの私は、とにかく動物が大好きで、かわいくて、いつも何気なく犬や猫と触れ合っていました。

でも、この本を読んで、世界中のすべての動物たちが幸せに楽しく暮らしているわけじゃないということがわかりました。障害を持っていても幸せに暮らしている犬もいれば、中には飼い主から虐待を受けている犬もいます。すくくかわいそうで、何とかならないのかと思いました。

ドッグトレーナーの正彦さんとベティの出会いのきっかけはある女性がシ

エルターから犬を引き取ってきたことです。シエルターから引き取ってきた時のベティは、目をキラキラさせ、ガリガリにやせ細り、脇腹の骨もくつきり見えていて、とても凶暴でした。

いくら動物が好きと言っても、私なら怖くて近寄れません。なのに、正彦さんはベティが人間と一緒に暮らすように里親を探してあげたいと必死に頑張っていました。

粘り強く何度も声をかけ、人間を怖くないと思えるように優しく接します。なかなかついてくれなくてもあきらめず、毎日声をかけ続けます。

私には、真似できません。最初は頑張っても、あまりついてくれないうちに途中であきらめてしまいたいそうです。そこが正彦さんと私の違いです。

そんな苦労もあったので、ベティが正彦さんにゆっくりに近づきしっぽをふつた瞬間は、私も感動しました。

凶暴だったベティがこんなに変わるなんて信じられません。何がベティを変えたのでしょうか。

それはきつと正彦さんの優しさで、周りの方々の必死のお世話があったからではないでしょうか。

私は、この本を読んで、将来、正彦さんみたいな動物を救う仕事をしたいと思いました。そして、正彦さんのように犬だけでなく、すべての動物を大切にできる優しい心を持っていたいと思います。

人間はもちろん、どんな動物にも命があります。その重さはみんな同じで変わらないと思います。

書名『虐待を受けた犬ベティ』

今西 乃子 著

(寸評)

この本を読んで「人間も動物も命の重さが同じ」であるということ、素直に表現できたところが素晴らしいです。また、咲希さんのどんな動物に対しても正面から接しているという思いや人に優しく接しているという思いがとてもよく伝わりました。虐待を受けた犬とドッグトレーナーとの交流を通じて、自分の将来についても考えることができたのはとても良い本に出会いましたね。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。

※児童の学年は、コンクールが行われた平成26年度当時のものです。